



西籍慨論

二



仁18
51
2



門信 13
號 51
卷 2



西籍慨論講本二之卷

叔殷乃末世三十一代目れ王が名多辛と云ふ是が
謂ゆめ紂王にへ是又夏の桀王が如く人ハて
何之れと暴虐の事か有めて、此時小西伯名ハ昌
と申せり有て是が彼いを以る周文王て、これ終
紂王此三公々去以も勅々居れて追々紂小背い
了諸候を懐けて下に付て、此者甚々の野智か
了男て、紂王が惡行の幸として己をうハべと取繕
つて、身人絶々し人の面向くやうと其行ひ強勉



先づもので、其時崇候虎や云者、紂王尔告て申す。小に西伯積善累徳、諸候皆嚮之、將不利於帝と申す。故に紂王ハ尤に聞入て、西伯ヲ羨里と云處へ囚へとて、六で西伯ハ囚ハき乃内尔彼伏羲氏カおしらへとほ八卦へ象辞ヲ云多作つて添たて、其史記より朱熹乃通鑑易の本義より、夏高之末易道中微、文王拘於羨里、而繫象辞、易道復興とあり、此も孔子の作つと云十翼に易之興也、其於中古子作易者、其有憂患乎、といひ、由は易之興也、其當殷之末世、周之盛徳邪、當文王與紂之事邪、と

申してあり、共思ひ合せ、宜しいて、此は文王、易ハ繫は、辞は、の趣意ハ、と云ふと云ふ、己ら君殷紂王が惡行ある隙を伺て、國を奪はうと云ふ、乃奸智よと思付て、伏羲氏ハ八卦ハ、彼國ハ早くて傳へつて、人の信をば、の故、夫へ附會して、其いひ成やうハ、君とあは人も、不徳ふまは、徳ある者、其君ハ代けても、苦しからぬ、落て来は、やうに取成し、又世の常へ、臣やして、君と亡きと、義ハ及まなと、天命の歸し、この時、苦しからぬ様にも、ては、けら、と言ふし、其は、殷の湯王が、桀王が放

出でて國と奪はるるのも實ハ天理に叶つてゐると
云ふ意ないひ落し扱已きもさう為んとの下心で
人さる占^{ウラナヒ}て驗^{ヒシ}の有を後立^{ウシロダテ}にして是人作^シあら
も自然乃天地の道也やと世の人々欺^カに後に已^マ
及^リ違^フせむ時乃罪^ノ字天命^ノ託^ケて^{カコツケ}られ覆^サへ^{オフ}ま地
盤としてあらかじき世人に志^シ免^シ置^タも乃て^ム
ほ^シ周易六十四卦の中^ニも澤^ノ火^ノ革^ノの卦の辞が文
王^ノことに心を大^ニ免^ルる物と見^ヘは^シて^ム夫ゆ^ニ此
卦の象辞傳^ルも革^云く天地革^而四時成^易武革命
順^乎天而應^乎人革^之時^大矣哉と有^杯が則^易と作

つゝ白^る本意で君として不徳なきも有徳乃人^ノ
出^て國と奪^ても苦^しりら^も是則天心也とやうに
偽^り字構^へるものて^ム殊に損益の卦ハ紂^ノ字伐^つ
年^ノ當^はるもので其象辞に利^有攸^往利^涉大^川と
う^けま^へ其子^リ時^ニ至^つて紂^ノ字^ヲつ^べて^テ其^年決^決
断^せしむる未^来記^ノ作^はるもので^ムこ^も尔^依て
武^王が果^{して}此^二卦^以て^テ了^る庚寅^ノ年^ニ孟^津
とい^ふ大^川字^ヲ涉^り殷^ノ都^ニ攻^入して其^君王^と弑^す
し^こで^ム孔子^が雷^水解^ノ象^辞と評^しる^る語^に作^る
易^者其^知盜^乎とい^ふは^る易^乃作者^ノ本^意也

く見ぬ^ハこ^ハ語^テ公^ハ猶^クさ^クく^ノ祥瑞と^シム^マ
う^ハゆ^ハて^ハ殷^亡び^ハ周^興る^ヘレ^ハ余^期乃^由と^シらし^ク
ゆ^ハる^曆法^とも^はく^リ改^定易^と律^と以^テ証^會して^ハ始^メ
めて^ハ長^年數^ハ其^誕と^ハゆ^ハる^ノ未^來記^ハ以^テ之^ヲ為^ス
張^本其^設と^ハふ^シ子^思が^いり^ヨる^其事^ヲ神^小志^ト
民^ニ信^多と^ラせん^ヤし^ムも^ハけ^ルあ^やり^是ら^ノ事^ハ
別^ル妻^シム^申も^トて^ハ中^ニ以^テ一^席二^席に^去ひ^テ
く^され^ハ事^テハ^ふい^テハ^斯て^ハ殷^紂王^ハ西^伯子^美
里^ハ庫^ニ拘^へた^けると^ハ百^日ハ^らり^モい^ふた^らし^タ
所^リ西^伯が^臣に^大顛^閔天^敬宜^生有^と云^ふし^ハ共

が^計ハ免^々らし^ム義^女名^馬其^外撞^クの^矢に^らし^ム
其^物以^テ取^ルる^ハて^ハ紂^王不^献して^ハ其^罪以^テ贖^ハは^ス
所^リ紂^王ハ^女好^乃事^故心^不お^ぬ甚^ニた^ハ悦^んで^麗し^タ
死^女計^リて^ハ西^伯が^罪は^釋屯^に足^ル事^ヲま^して^ハ
り^ハ色^々の^物ヲ^奉る^事有^ル也^教は^らん^ヤ云^テ悦^ハ
ひ^ノ餘^ニ弓^矢斧^鉞と^あら^ハ征^伐と^心の^ゆく^ハ
せ^よと^云て^ハゆ^めし^ムて^ハ爰^ニ紂^王が^死す^ル所^ハ
所^リて^ハ西^伯が^死す^ル所^ニ歸^リて^ハは^らる^ノ我^ハ
惡^事ヲ^紂王^に告^スる^崇侯^虎が^死す^ル不^して^ハ益^ス
く^上へ^トり^テ人^字ヲ^不し^テ或^ハ兵^ヲ以^テ諸^侯

子北やし好むして、國といろ次々て、六北の本
書、明年伐犬戎、明年伐密須、明年敗蕃國、明年伐邠、
明年伐崇侯虎、西伯歸、乃陰修德行善、諸侯多叛紂、而
往歸西伯、々々、滋大、紂由是稍失權重、と有、通、
て、
ム、叔其砌り呂尚と古者有て、是ハ元紂王小事、
又め者て、何つゝか、その用ひられけり事と憤り、世
と乃がれて、甚、困窮にらし、年老して七十餘、
れども、謀畧のそぐれ、る男なる、小、諸侯、
遊説して見、これとも心のあふ者も、
於く、乃中に西伯が殷の王位と奪、
んと、
下心、
と、
大

小は、
へ、
事、
ら、
さ、
し、
を、
已、
れ、
も、
其、
尾、
に、
は、
い、
ふ、
也、
尔、
出、
ん、
と、
そ、
る、
心、
で、
々、
と、
於、
く、
西、
伯、
に、
出、
く、
わ、
せ、
謀、
略、
を、
語、
て、
や、
り、
入、
り、
用、
ひ、
ら、
る、
ん、
や、
下、
た、
と、
志、
て、
渭、
水、
と、
云、
ふ、
河、
の、
邊、
に、
巢、
と、
は、
は、
に、
こ、
と、
せ、
て、
西、
伯、
が、
獵、
ふ、
出、
は、
れ、
待、
し、
居、
ん、
べ、
し、
則、
本、
書、
に、
以、
漁、
釣、
軒、
周、
西、
伯、
と、
有、
は、
ん、
木、
の、
そ、
て、
し、
爰、
に、
西、
伯、
ハ、
獵、
ふ、
出、
ん、
と、
し、
ト、
ハ、
し、
白、
る、
處、
が、
今、
日、
の、
獲、
毛、
の、
ハ、
虎、
で、
も、
む、
く、
罷、
で、
も、
な、
く、
必、
ず、
王、
と、
ふ、
る、
の、
輔、
得、
ら、

ふれて居るから西伯ハハの川柳ヶ句に「つとは
きうふしく文王やいへよ」と云へぬ如く愛敬作
つてやハハ立てももの古ひうけてみるとこいつ
梅干親仁と思ひ乃外ハ是も川柳が「眞成に」と
ハハとハハの親仁とてと古にたす如く筆はうて
なつてもいや中く以て膽魂の忽らい親仁であは
から紂が王位を奪ふはかまふとハハ様くくと
談しぬ所ハ西伯ハ大に説て古ハ吾ハ先君
太公の時より當今聖人を得てあらふると時
吾ハ周ハ興はてあらふといふ傳へてあるが大方

白子れ事であるから吾が太公の子を望んで以
つた事久しき山へやれ太公の望んで以てなると
古ハの義多いて太公望と稱をへしと云て我と同
じ車にのせて取り立て師をかして猶敬て是と尚
ひ是を父とせると云ふれ義字以て師尚父と尊ひ
重く用ひて事と謀にふてム則本書に西伯脱美里
歸與呂尚陰謀修德以傾高政其事多兵權與奇計故
後世之言兵及周之陰權皆宋太公為本謀去古天下
三合其二歸周者太公之謀計居多とあるはよく考
へべきことである其謀計ハ諸山は軍法のみならず

と思へどもさうてなく、真言日蓮などの、賊法師共々
するやうな、わざもあるて、夫へ思ひ合をへんと
乃多う中にくら、乃丁候や女ふり、周にしさうに
了時に、太公望へ則丁候の形と畫^エれて、其の頭と目
と腹と股と足とに、箭は射付けて、呪^{ノロヒゴト}詛事なり、かの
丁候は、甚しく煩を出し、よて、よて、よて、使と遣ひし
て、臣とあり仕へば、かとうと云て、よて、よて、丁候
ハどうも苦しんで、此らぬら、いりふも仰ぐ、徒ひ
はせう云ふ、よて、太公望ハ、甲乙の日に、其頭に射
つに置、よて、矢をぬれ、丙丁の日に、八目、射付けて

了矢とぬれ、戊己の日に、八、其腹の矢はぬき、庚辛の
日に、八、股の矢をぬき、壬癸の日に、八、其足の矢をぬ
くと、丁候の病ハ、則愈むて、よて、よて、餘の諸候共々
わちなるまで、徒は、よて、よて、則本書乃頭書に
此事と記し、よて、史記の増注した、光緒と云人乃評
に、摠之、太公祇一妖魔怪誕之術耳、安足信哉、太史公
凡曰陰謀陰權等字、俱非太公本色、や、去つよハ、理
よ、よて、如何も是らハ、謀畧ふと云やうな、立
派な事なは、い、真言法師や、日蓮宗乃賊法師等の
よ、謂ゆる、兄ひ、又魔法など云と、同じ事、よ、猶思

ひあらずへ此惡工のハ論衡と云書小太公陰謀食
小兒以丹令身純赤長大教言殷亡殷民見兒身赤以
為天神及言殷亡皆謂高滅兵至牧野晨舉指燭姦謀
惑民權掩不備周之所諱也とあり猶此外にも韓
非子に文王資費仲而遊於紂之傍令之間紂而乱其
心と云ひ又周有王版紂令膠鬲索之文王不予費仲
来求因予之是膠鬲賢而費仲無道也周惡賢者之得
志也故昂費仲と云ともあつたところハ様々惡と
云ふ行ふて時の至るははは者てんて此ハ淮
南子小文王為玉門築靈臺以待紂之失と有る以毛

思合せへ事て俗の儒者とりくりやうの
と云ハ猫のんくが隠をやうか北しうくしてよれ
ははるとりうしいひか北らと聖人くとと云て毛
てもやき其下心ういやらしいてハ○叔右の如く
乃惡多をミ多して周とひろむめ處と見て紂王の
臣尔祖尹や云者西伯がしわ内子にくみやうて禍
乃いたらん事多懼れて紂王尔身の行ひ慎むを
れんし諫むととも次々を益々見んもくとやう
所々荀子には紂王親族に微子比干箕子ふと
去ふ忠臣有て輔佐してたうら西伯ハ終ふ未だ

これ革命の時のいたらぬ事を知て忠くしげにも
てふし、ちつて見合せ字法ぬて、論語に此事と
不免て、三、今天下有其二、以服事於殷、周之徳、可謂至
徳而已と、孔子の申し、ハこの由にて、但し孔子は
此語と、讚岐の大華と、去人が評して、論語ハ實小孔
子の善教と記し、ぬ書と、也、ハ此語ハ大不經なる
語と、也と、云はて、や、乃評に、天下者殷之天下也、西伯
者臣也、雖、尺土莫非殷之地、雖、一民莫非殷之人、周之
初者、岐山之下而已、而至有其二者、蠶食而有之、王
王上に在はせ、ハ、王乃地、王乃地と、王の地と蠶食を

ハ、叛に非をして何ぞ、史記に西伯、呂尚と圖て、諸侯
ハ、傾心の趣あり、これを以て是とみ、也、ハ、奇謀を以
て、諸侯大臣とし、ぬ、王明ふて、何と、以て、其不臣と
以て、至徳と稱するや、此語勢字に、既に其二を
有は、時を設て、服事と、べ、ら、也、然、是、共、ふ、不、服、事、を
ほとの謂、於、季、譬、へ、全、く、天下、を、有、は、とも、其、君、も、服
事をへ、から、は、は、此、理、何、らん、ハ、我、邦、の、君、臣、ハ、義、成
主、と、也、彼、國、ハ、地、多、主、と、也、其、隔、め、事、殊、遠、か、と、い
は、ぬ、り、是、は、盡、く、尤、れ、る、論、て、ム、然、れ、とも、孔子、の、か
く、西、伯、也、譽、さ、る、に、は、記、も、な、る、其、記、と、い、ハ、ハ、孔子

事しやと云はして其職とせてくほ了又彼箕子は
れ紂王の親戚てもあり是彼と理と盡してい
む所がまかぬやとて或人をも免てとても悪行
ハやむと云はははら去るがよいと云ふに
箕子が云ふにハ人の臣や成てはさめを
そとて去るのハホれ君の悪を彰と理とゆへ
はさうハ得せぬと云はてハぞと狂氣のほ
髪と破り多あふれて奴やなりかくれて
琴子ひか
多一人悲て居ると紂王ハホれと囚へたて
乃比干ハこれも紂王の親戚てハら
は忠義の

ふり手者ゆへ君ハあやほちあるや
争ふ牙或もの也やと云て直言を發して死
諫死の時紂王怒て吾を聖人の心ハ七
の竅あると云事也やがみやうと云て其比干
し心を割て視いてム様の子人くと云
と云ふハ扱と死神のと云はいておるとい
しかとのふいものふも爰又周武王も
紂王乃悪行の益く甚と云待らぐひつ
の父西伯の遺言に時至て疑ふ事
の白は通て更不疑ハ也兵字ハ
殷有重罪不

可以不伐と云ひふも自ら専ら小せぬと云ふの心
父西伯が木主に載せ玉号を稱して文王となし
吾も太子を稱し自ら四萬五千人に將として誓
詞を立て諸侯共小紂王の惡行を以て之を討せ今
予を維行天之罰勉哉所不勉爾身有戮ふと多し
て殷乃都を打入る時小伯夷叔齊と云ふ兄弟二人
の有てこれをも孤竹と云國の子ふら其父の
死ぬめ時に後の継ハ弟の叔齊と定めて死んで
所々死後亦叔齊ハ兄の伯夷に讓ふと云ふ伯夷
ハ父命也と云て國をのりていと叔齊も又兄乃

有るに我立へて死して云はしと云はて遁るから
とて國人を以て中子に立せて云はしに此兄弟
ハ弟の西伯も人子にけりて實に
人の子心得て投化したる所が右の如
く叛逆と云ふ事外にとりて武王
が馬を叩て諫て去らには父死不葬及干弋可謂
孝子以臣弑君可謂仁乎と云はる處が武王が左
右の者共既亦殺ゆんと云はる時に彼太公望が云ふ
には是ハ義人じやに依て殺を事ふると云はて
扶て去らしぬと云はるこの二人が事は猶未に出

る。至つては人て。○斯て殷は紂王も、武士も
攻来ると聞、兵士七十萬人を發して、戦はふる所が
とて、死、神れついで、れは事故、一戦、小打負て走
及て、鹿臺と云臺を登て、自ら火中に飛入て、燔死
して、時、に武王も、紂王が燔死して、鬼不至つ
自ら弓矢射る事、三矢、けて車より下り、釵と拔て
是を撃ち、黄越と以て、紂王の頭を斬、大白の旗に懸
け、又、彼姐已と、今一人、以て愛妾、経れて死たるあり
右の如く、其頭と、小白の旗と、云に懸け、はせ、この時
ふらの微子、八、降参に出して、云、扱、り、箕子、が囚れ

て居ると釋し、又、諫を、殺ほれ、この、比干、墓子封
し、紂王の子、の武庚、禄父と云者、を封し、殷の先祖の
祀と續しめ、諸侯とあした、か、共、其、叛、か、ん、事、以、恐
れ、我、弟、の、管、叔、鮮、蔡、叔、度、と、云、者、と、添、て、殷、乃、舊、都、を
治、め、せ、爰、に、於、て、れ、乃、も、自、ら、王、や、南、で、功、臣、と、封
し、弟、一、に、太、公、望、を、齊、や、云、大、國、に、封、し、弟、の、周、公、且
子、ハ、魯、と、云、不、國、を、封、し、其、外、と、も、夫、も、小、功、を、賞、し、
叔、周、公、且、ら、と、相、計、て、已、が、叛、逆、の、罪、と、覆、ひ、隠、し、又
向、後、へ、人、尔、奪、ハ、了、ま、し、爰、為、小、彼、父、王、が、美、里、に、於
て、作、り、置、は、易、ハ、天、道、天、命、と、彌、の、一、法、也、と、彼、尚

書小見一あり種々乃文と作て其託言を致した物
て公實に之王武王周公且ら遠く慮の深きと古今
並ぶ者はあるはいて公殷の世継ぎとふも三十代
五百八年で此亡ひはふ年が紂王の五十二年庚寅
乃年て公實に彼伯夷叔齊ハ武王が既小殷の紂王
と亡して自立致し國中乃諸侯共ら夫と王とし尊
ぶ成りて是を耻らしく思ひ周乃粟を食ふはと
首陽山と云ふ山に隠れて始めハ蕨子堀て食てい
ふら思へはかく周の代と有れてハ國中此物何に
よら屯周の物じや尔依て夫小生白は物じ食ハ

た事ではふいと心とをへ免て食を絶ちすて小死
せんときぬ時に歌以作つとて公其歌不登彼西山
兮采其薇矣以暴易暴不知其非矣神農虞夏忽焉没
兮我安適歸矣于嗟徂兮命之衰矣と歌ふて逐る首
陽山に餓死しむて公實小我人にして奇持ふ人
て孔子もいよく稱て舌の賢人なりとも仁と求免
て仁を得たりとも又不降其志不辱其身伯夷叔齊
子ともかたてりて公又奇師翁ハふれ兩人の像
とりける繪が賛に「こやけへくから國人のれを
かけさふはいハ今けら論ふべくもけらをてか

中に伯夷叔齊と云ひけん人の武王が軍を留めし
ハ少ゆ君と臣との区別も亦字にもむふたりに
似ありきと首陽の山にして飯にうへてとほか
れろくとちち乃神乃御霊やうくふらさしけむか
しホキやいつこの國にしても我が天に神ろ死乃
大御教へぬあふはしうを自らあらん心とふ
ねは走ものごとくはやと春のさばらひのどろ
あつ天の日月げも忽出にに季とあてはれか
かにえさる事てふはたもつたし人乃評ふハまは
唐の韓退子が伯夷の頌と云ふ士之特立獨行適於

義而已不顧人之是非皆豪傑之士信道篤而自明知
者也一家非之力行而不惑者寡矣至於一國一州非
之力行而不惑者蓋天下一人而已矣至若舉世非之
力行而不惑者則十百全乃一人而已耳若伯夷者窮
天地且萬世而不顧者也云々當殷之亡周之興云々
武王周公聖人也率天下之賢士與天下之諸侯而往
攻之未嘗聞有非之者也彼伯夷叔齊者乃獨以為不
可殷既滅矣天下宗周彼二子者獨耻食其粟餓死而
不顧繇是而言夫豈有求而為哉信道篤而目知明者
也今世之所謂士者一凡人譽之則自以為有餘一凡

人沮之則自以為不足彼獨非聖人自是如此云今
故曰若伯夷者特立獨行窮天地亘萬世而不顧者也
又朱子評孟子曰聖人百世之師也伯夷是也故聞
伯夷之風者頑夫廉懦夫有立志奮乎百世之上百世
之下聞者莫不興起也夫孟子之於伯夷其論之詳也
或以為聖人清云此論乃以百世之師歸之而孔子
及不與焉何哉孔子道大德中而無迹故學之者沒身
讚仰而不足伯夷志潔行高而迹著故暴之者一日咸
慨而有餘也然則伯夷之功不為小也云云へ了並小
たしろ或評てムハけ余に王直ら伯夷十辨云

去ふとし免をさく論あるけととも大抵武
王の主殺しの罪をうするると小せんとも作しは
説ともにて云ふ小も思らむとれを御國の儒者小
もけり事にして伯夷は非やしへ了へ物部徂徠伊
藤東涯南やじやかもろこし人へ已か國の聖人と
もの事しや小依てし云者もあてぢう事しや
これ漢人すら右の朱子韓退子らがやつ小いへは
もあつた多皇國乃儒者ともやういふ非心得り
氣味乃いはい輩で事不當にたむらハ武王らし
ぞてもやる氣をみへはでムハ武王も討王多七

して後二年目尔年九十三歳で死んで其子誦と云
か十二で代て王と成いて云成王と云よは是がと
て云これ不味けて王がはる周の武王とし九十
三にしてと味かまし時その子の成王いほ女十三
歳なりと記せり然れど成王は武王より八十一の時
の子尔てやあはけは古つ人ハ云く徒外とし事ハ
論ふけと共猶いふにやや覺ゆ事此王早く子
共あはた有つまハ子孫と云ひ乃危ぶみも南に
ふ得生せよはほらほらいしれ老のよはても猶好
色心のやほほりしふりけり聖人と云ふ者もはる

もれふやありけん」と記しよかれましたが、以りに
よさふもて此成王が次にも子ハ好有て云又武
王が父の女王も免つさう年のよめはて子は生
免れて左傳に管蔡邶霍魯衛毛聃郟曹滕畢原鄆郇
文之昭也や阿るらわは十六箇國の君に封じ
るはみふ文王の子で云の上ふ武王と今一人伯邑
考云はて武王より兄もあはれから十八人ありに
ましてこれ等男子計李也やによはては女子も
十人と十五人と有あらし又か弟とも有あらし
から丈夫ふ四五十人の子持てあつて云る色々

又大愛ふとく男と云ふも乃ハ若い女ふさへ合へ
ハ、隨令七十八に立ても子^を生ぜるとの女が
ら、文王も妻とふんとぬいてかやうに生しぬらび
是も乃もあふべき事ぶら父王が妻の大姫と云け
た為婆く^がけちらぬ^をとのてムなせと云
ふ武王が殷と七しころぎのときに弟とも子と
ふ國くに封じころら中ふ康叔封と云ふと再李載
といふ同母乃弟が有て是ハいふか少くて國に封
せられなんふとあるら此時武王を九十一歳の時
てム^はを^をハと乃二人は弟ハやうく十四五で

あつことみへは、おくら年數は^はにてみるとら
の大姫といふら百ふ余むと上とふし白る時の子
てム女て百有餘歳にれつてもは^はと子^は生出ると
ハとんと^はつらし死婆くあ^はムやうの事も人
ハうは^はりと見すこしてとるら氣^はつれて書を
むとこんふ^はらしれたとも見出たものでム彼
五雜俎^はに色くかやう乃^はは^はし^は事字人部
といふ所に記しあは^はて^はるら是ハハ心^はらふ
ん^は事^は見へめてム俗乃學者ハとらム聖人ト云
へは聞^はちして佛者が佛^は思^はうやうに心得て^は

了。慥分女も好むもので、○叔この成王も世不成
て、彼幼弱の事、周公且へ己を封せられ、魯
魯國に入府ハせて自ら王の席ハ居て成王と
輔佐いふ、政事専らにして既に其位ヲ篡む
し、多わねか、も篡ひはうふも見へたといふ
事、多、彼燕の呂公奭太公望を、しめ彼紂王の武
康に附といふ、管叔蔡叔其外の兄弟とも周公且
を疑ふ、彼是と流言を、多、中にも、乃管叔蔡叔
ハ周公且の罪を、とへん、して、紂王の子の武
庚を、挾て、乱を作して、ム、おれへか、やうあは、一、紀

け、管叔蔡叔乃二人ハ自力で、周公且ハ勝た、
あ、ハ、ぬ、事を知、多、ゆ、牙、乃武庚ハ取、て、立、て
事、多、計、ら、ハ、は、殷、と、し、こ、小、者、共、も、多、く、つ、或、徒、よ、と
と、考、へ、また、武庚も父紂王の仇と報ひ、を、思、は、て
も、是、も、當、時、は、う、ん、な、了、周、小、ハ、敵、し、う、た、死、事、ゆ、へ
管叔蔡叔ハ此催し、成、幸、ひ、に、同、心、し、て、思、ひ、立、多、も
の、て、ム、爰、尔、於、て、周、公、且、も、軍、を、興、し、て、大、嘯、う、あ、向
ふ、其、兄、管、叔、蔡、叔、と、か、の、武、庚、を、殺、し、蔡、叔、と、ハ、北、に
を、北、に、て、武、庚、ハ、所、領、に、二、に、尔、を、け、未、だ、茅、康、叔、と
去、を、衛、と、云、國、を、封、し、彼、紂、王、の、兄、の、微、子、を、宋、と、去

國小立て殷の祠を継ぎ免かき是二年計てもか
けて其邊で字ひし由の寧免ふや去事てんこれ
にけてハ羅人かろハ蘇軾かのハハ以ハ東坡ハ武
王ハ論しハ文ハ中ハ此事ハ去て武王非聖人也
昔者孔子蓋罪湯武顧自以為殷之子孫而周人也故
不散然數致意焉云々伯夷叙齊之於武王也蓋謂之
弑君至耻之不食其粟而孔子予之其非武王也甚矣
此孔子之家法也云々而孟軻始乱之曰吾聞武王誅
獨夫紂未聞弑君也自是學者以湯武為聖人之正若
當然者皆孔子之罪人也云々殺其父封其子其子非

人也則可使其子而果人也則必死之云々武王親以
黃鉞斬紂使武庚受封而不叛豈復人也哉故武庚之
必叛不待智者而後知也武王之封武庚蓋亦不得已
焉耳殷有天下六百年云々紂雖無道其故家遺俗未
盡滅也三今天下有其二殷不伐周而周伐之誅其君
夷其社稷諸侯必有不悅者故封武庚以慰之此豈武
王之意哉故曰武王非聖人也云々いはいはしより是は
ちう去得たは論て甚多ともしろい賢小東坡ハ此
文にいつと了如く武王ハ紂王と亡しハ了とは非
として従ハぬ國も多人有るてムとれハ成王

とて然れども其仇を誅すべし手いともかくて
乃儘にとひしり是も後益々乱まりハしん代々
不謀及人も絶此四方の夷狄といやしる國は
らハ攻られた彼是あけし死間もよく舟て殺し
多昭王うら七代目の厲王と女小王を國人不叛り
れて出奔する此厲王うら三代めの幽王と云小王
も彼誰も知てゐる褒姒と云小義女は麗愛とい所
ろこ乃女うらんと笑へぬ女てあけむら幽王ハ是
と笑ハせんと欲して千計萬方をねても笑ハぬ處
ろと此頃國ハ乱れてい故に寇のせは至は事屢

あふ其時を國々の軍兵に知らせん為る烽火以擧
ると褒姒はそれを見てハ笑ふてんを大て王ハ
褒姒ら笑いとみたぐらるやは寇は未ぬ時ても烽火
火多らるる其時ハ國々の軍兵が寇乃来ると思
はてんも来るとはと寇も何もたぬうらむなしと
かへるかやりの事ろまへくく阿婆さるいへ後
ハ國々乃軍兵も合点し事の話しと上ても来ぬと
なほしてん扱此褒姒ら生んる子多次尔立んと
してその本妻と廢し其の生んる子太子れも廢
し、め所が歸の申候と云か怒て西に方犬戎と云

夷狄かたむいて幽王をせめて、此時幽王ハ例
の烽火をあげて軍兵を催はたさるべきに度々
ははらまて、故今度ハ軍兵一人も至らぬ彼
川柳点下、下らひこつてハないと幽王の多
云はる如く此時亦や、褒姒を笑ひとほしこ
るハあつてさハくち幽王ハ殺れりて
ハ武王も幽王に至て二百五十七年にして周ハ
はた亡むとてハ、かくに於て彼申候と、その外ハ諸
候とも相談し、幽王ハ太子宣臼と云ふ立て王と
し、是字平王と云てハ、今ゆての都ハ亡はれり

故東の方維也、女ふ地に遷して是より以來の世
とハ東周と云ふてハ、此東周の平王も女ふ代り
ハ勢ひ益々衰微して、所れともふれり如く諸侯し
ハ小輩ハ勢ひ強ハたも、小儘に傍の小國ともと死
す、従つてつゝんとりして一向に周の下知ハ崩れ
ふ、周乃領地も段々へて、つたて來り其終に平王
より十二代目の悼王と云ふ王ハ、其弟子朝といふ
ハ殺つた、悼王ハ五人目の哀王と云ふ王も、
其弟あり叔襲と云ふ乃り殺して其位を奪つて
ハ、是と思王と云ふ所り位ハ、はいて五月をふ

ち末の身小嵬やいふ有りて其兄思王と殺して位
字奪ふ是に考王と云ては是より後ハ領地もわ
くく食て生ていふと云くらしいにへつて見たり
もふらり諸侯共々いひたつけらるゝてハ則通
鑑ハ其土地人民不足以比強國之大夫と云ふ又
帝王世記云者にも雖居天子之位号為諸侯所役
逼與家人無量やも去てつたふとのとてハや色て
もなましく續いて以て平王から二十二人めの
赧王と云ふ時小秦も亦小國からせ知られたるの
有て了地とれはらす獻て降参わぬしよて周ハ

孫こそけ七かて祠もあへてしははて秦代と云
ふになつとてハ漢人揚慎と云ふ者の言に周三十
七王八百六十五年然自武王滅殷至幽王二百五十
七年而昭王之時王道已微懿王之時王道遂衰昭王
南巡不及厲王死干墉蓋此二百五十七年之内變故
多矣東遷以後不足言也治日之少如此と云つた
通史の事てハ俗乃儒者ともいんと夏殷周乃三代
といひ中亦も周世々々や云て寢ても起てもう
はく戀しりるハハの代乃事しやう實ハ五七年と
やすらりにあさまけなや致さねてハ○扱

孔子ハこれ東周の代に未だ方靈王と云王は二十
一年と云年子生れ多は人多先祖も殷紂王の兄乃
微子ハ封せられ多は宋と云國乃血脉の人て父
の名成叔梁紇といひ母は顔子氏と云叔梁紇の
年老了はて男子の多き事と云に父尼丘山と云
小山の神を待て右の顔子氏と野合して生んば子
てハ生れて首上に竊め所り有て尼丘山の形し
てあつたはゆへ名を丘と云ひ字を仲尼と付ま
とてハ此乃生れは魯の國の昌平郷の陬
邑と云所てハ此小兒の時々遊ふと云

此歌の言ハ聖人といハ湯武の
やま悪人といハ桀の初め
孔子も聖人といハあり
らぬと云孔子ハ聖人の侍
りありといハあり

禮儀は容と云は何かとうく行義よく凡へて
く長て十九歳乃時書多むて子ハ生んば其
時魯の君昭公ハ所り鯉字と伯夷と云てハ夫
れめて多しとて名ハ鯉字と伯夷と云てハ夫
り子の名は伯と云ハ字をハ子思と云て中庸成作
つと人てハ叔此孔子ハ老子に云らば事も有
たふとも一跡ハ正しれた人て此人のと云
師翁もからんからふしく響て歌ふも聖セイ
人ニムも人ハ去へども聖人のあがひを孔子ハ
く文人やけへよまきた不どの事てハ此人生涯の

事多しんく申はハカの論語を吾十有五にして
學に志し三十にして立と云ふ多ける如く十五の
時とて學問に志して三十歳の時其心はしとる所
の本意より立と云事てを所色をも貪しく賤し
世には誰もそふれたる人と云事ハ知てたれやも
用ゆる人ふくしとらく乃間魯の君小仕へまら未
と不して用ひられを國くと流浪してもちゆる人
もあらふかと心ふらるらハるり乱れ自國に
こつと一人乃と死人ゆへとりをもて人ハ他もそ
祿はるく習ひにて謗言ふやにたはては其國くと

さて又諸國の知者共乃所へ行てハ食客小なり
て居るををもしハくは事て余て不用以は人ら
なれ故ふるく乃事ハ公山不狃と云ふ叛逆人
か用ひもうや云て召ふるふしぬにけへ往ふと致
した程の事多ム其國々れ君らか用ひぬも理ふ
事は其時分ハるらも別して國からり乱れはし
と王城のいらしるにす所と孔子ハ國の乱りか
ハしれ多ふと王と王らしく専ら事専らと此
る故諸國の君とも心ふ合ぬとるム其流浪して
あるとくちもけく難義ふいしとる中にも

楚と云ふ國牙以けりと云ふは道に於て陳國と蔡國と云ふ二國の軍兵に云ふは是て糧と絶ち従ふ者共はくもみ有起けともふらぬ程に腹とへひしと事も有り又或と紀ハ陽虎や云ふと語好う云やとみはらへられて彼コイツ此奴と孔子云うしる手みしぐりと云へる如く其しをつとりしへらぬら知らぬらとらへられぬ事林もある又司馬桓魋と云ふ者にハ殺はれんとし爲李何か度くから記目にも逢ふ事と云さてこの人字ハ聖人々くと云はて其聖人と云ふ者儒者かとの云所てハ其心

も行ひも尋常の人とい異にして佛者らら佛はうもさ余云やうふとれもれらる者ハの如くいふはすうつらうく孔子の言行成されハその心も行ひも尋常の人ハ何もらハは事ある多く正しくよき人と云ふはての事と云やれも先身一に神と恐れ敬ひて生ふる人に仕へは如く少か乃物も初穂も以はも我祖乃靈に於て又十九歳ハ時書成ひハ一伯夷と云を生し多ふと見れハ礼記に三十ふして娶ると云ふ事ハおれと二十はへふ女小合ひ又うまふ物ハ違合にをきとて山梁乃雌雉時哉

々々ときくをううは死さるべきをいふ又原壤と云
老人のなし得ることもなく長生を成すの脛
をうつて老て死せよと賊や云ふとやとハむ
れも云ひ又秘藏の弟子の顔淵が死んたる時ハ鳴
呼天我々亡月せりふと云はれ去て禮記に
哭きと云ふ慟せぬと云ひ定むるやけぬけぬの
餘り慟して正氣多失いはれはくを雷鳴り風杯
乃烈しき時もこの方と同じ事云ふハかたごと
へいろと愛してたせりしうまの主教の類は
へて道むらぬ事云ふ者う有めやいふ小腹立

て諸君を討んばと關らぬ事ふもけし出て願ひ
ふやも致し又似て非なるもの多惡むや云て似
山とへいりふにくか其任不當つては既に正
印杯去ものどへ首はへ不打切てムこ此余其言
行と見ると何もそけし行ひぬ人能も我師翁に
心も行もよふ似る人てム是を過言と思ハるく
人ハなく孔子乃書成とみよと吾翁の書は讀て其
言行以味ひて悟るかよわてム叔世のひか者此為
ハ惡みそしらとて世不入とられふんふ南也共
いれりも世よてらへ人小背くと云やフふふ

ふ記事なく夫ても君親の事字へ其惡きた覆ひ隠
し枉てもを成ふ去いはけもをふと去り本志て
とらもいへぬはミのちるを記入てん斯て生涯
用ひられぬ事多憤つて小言と云ひつけさう何を
著述とてもせもさう今乃世に傳へる尚書序字正
し詩經の重複多削去て三百篇とふは已り生
れたる諸越乃國の乱てかハしん定れ了君南て
はに第一の道の大本り立ぬ事字殊れ外亦歎れ御
國の如く道の本たる君の統と定ぬぬの心り有
て其時分もぬさう衰へるとるけ色共國の王統字

尊を存て尊んで外とハかとし賤しめ口と開けハ
真の道乃心へと解けとし魯國の記録よと春秋
と云ふ字撰定して其事實の上に勸善懲惡の筆意
とあらハしそれハ東周の平王より四十九年まで筆
と起して同じく敬王より三十九年まで二百四十餘
年間乃を言少くして義甚多ふらく免てさ記物
ふら記取てら此春秋多あるんぬ孔子の心は
牙林事ハ古道の大意亦委く申さ通され記てと
かく道とさる事ハ事實の上てさうてハ志此を空
論するハ人の心入る事とさり以て不吾以知は

者なきは春秋か見れず罪をば者ぞれ多く春秋
かとほへ云ひといて是程孔子乃心のよくみへは
者ハ在るその生涯ハ真心と見るも實に涙のたけ
れぬ事てふはてつ不とに心算こめて其心にあら
ハし置いたまふや本とて乱りあつた自然の國から
比へ小さくも孔子の心を用心せぬ者れよく用ひ
る顔れよとして孔子たへ譽れらしてたのふ
の事てふ孟子云はる言に孔子春秋を作はて
乱臣賊子懼るると云はるに共是ハ儒者のさへ
はてたてて實ハ一向に六の春秋乃たくろも字

用ひる者菊ハ孔子とて後ハ益々乱れてとうく
周ハ右申す如く根こけけ亡む其祠も白へて孔子
生涯乃小言骨とりもむいふなり其後とるもこれ
如く實ハ孔子は悪き國ハ生れてしむ日孫をとつ
ぬとてム叔身子ハ三千人有むと云ふ事てム斯て
周敬王乃四十一年と云ふ年乃四月に七十三歳て
率しよてム皇國てハ懿徳天皇の御代三十一年小
わよはてム叔孔子の子伯夷ハ五十歳ハ孔子より
先ハ死て其子ハ子思是れ九代後乃子壤と云ふ
漢の世に取立ちて了以未連綿として其の家ハ

夫孔子の廟は仕爲てるの神主とふり今に清の代
迄傳つて代々爾廢未ふせず衍聖侯と云ふに封せ
られて成るは是全に孔子の誠心か天津神の御心
に叶ふて成るからのとて有りさくもろこして
ハ孔子乃家也と古の家を云いて又奇なりとに
ハ孔子の廟ははる中へハ蒞ふとの類惡或
草多生せり又ありし或虫も住まも鳥も巢と作らり
今以て大社て人の参詣せる事ハつも絶り又神靈
を現し多しとも云ハく有りて實に此人ハ神に相
違ふいてム○さて右申さる如く春秋の始先詩經

書經形とも孔子れ正しぬるのよて著しよるてハ
るら又論語ハ此人生涯の言行と弟子等乃聞覺へ
居さる以後に記し此多しも乃て隨分なりし或書
てハ○扱りらも倭も儒者と云ふ或は者ともハ
皆ホハ孔子以學の親とし本尊と致し事て其儒者
しもの中ハ諸越のハしハらふにいて御國の儒者
ハ大方ハ此孔子の本意ハよく得さると思ハはる
ハ亦く別して近世に古學と云ふ學風多し國ハ出
さば儒者もも殊ふとやうてムとれも次々に云
ひませる今日ハ其儒者とも殊ふなりしり

唐虞三代則いづゆ二帝三王と云ふ者としの
世の終りの處を也とて夫と統て評しふら
其古學者流の儒者らう心得ちうひとらうと云
ませう此ハ篤胤ハ先年りの太宰彌右衛門号成春
臺と申白了儒者ハ阿らハしむめ辨道書と云書の
非説と辨しむほや乃一條てム夫ハ先辨道書ハ日
本乃今の世多みるに中華の昔に及はるといへ
も天下ハ全人聖人の道にてたさほり候と存し候
然もハ天下の人悉く聖人の教へにとつて禽獸ハ
たちいらすモ公ハ上ル居てろの富貴を保ち士大

夫ハ中におて其禄位を安んじ庶民農工商賈ハ下
に居て其家業多樂と奴婢藏獲鯁寡孤獨の輩迄も
暴虐ふみハと天下平場々四海無事有るハはつと
く聖人の所業もて候と云て有はるはつ漢國に
て皇國のいまの御世此如くめてぬと治るは事
彼國の世く乃歴史と見へさるに太宰ハ中華のし
かしふ及ハ此と云はるハ漢國の誰ハ世成さして
云ふ小らと思ふハ彼事くしく云ふ堯舜禹湯武
世此事云つと物多ム然れとも其牽強甚くを死
たは事て何として彼れらう代々以る皇國ハ今乃

免て女御代ふ比へられませうと夫ハハかにや
云に先堯舜り代と云へハ君臣上下の差別止し
つと父ハ慈有る臣ハ節ある皇國ハはにらる
てこれハとんや禽獸乃有は由てんやの君臣上下
ハ差別ふしと云ふハハ堯ハ天子と云ふとら
のり
形から其女と農父の舜に嫁せよめと如何不舜も
はと農父の身として天子やめ者の二女と書と
して安んし居るは如何尔是ハ書經不堯ウ我其
試哉女干時觀厥刑于二女とあるハ舜り入とな
て試みやりとて斯く計いひは事とや南と云は

腐儒者乃常談ふれや然もあらも堯ハ何として
愚なりしと人となすと試み了るハ女と嫁せよと
ても其人やふれ知もぬといふ事ハなハ強ては
うせ給ハそ乃行状不知ぬや云へく堯も愚人なり
と論ずし是も聖人かりとして最もかしこき者な
はいらにそや人の只一言に依りも其胸中へ知
とら又字書ふも聖者聲也聞聲知情故曰聖也と
云事もみへぬ了不堯實に聖からハ一面會もし
らむにハ其人物は直に知れ了答ハ事ふて幸ふ
て舜も位とも禪ふ不也不こころと云ふはこそ宣

しれ若し縣々如く目利違ひて有りれば何と
す了徒に王とほる者の二女と農父々人と此れと
心みん爲に穢してくろく是上下の差別なく
軽忽にあらせして何や又父を慈なくと云ゆへ
堯舜子も傳へせしむ俱に他人に禪せるといふ
然亦小夫く天下と重んじて乃事かると云ふ是も
儒者乃常諺々も共しうらは湯武杯もかにとて堯
舜も心小次て臣下も有徳の者多撰て禪らる何
る不徳の了子に傳へたは是湯武も其子に愛不
溺れて天下とわく々し事小致したるは亦も何ら

く堯舜も受禪もゆく二代にして行通らる師の云
れし如く却て後世小王莽曹操も徒乃起るへ此其
源と開れらるにて無用と也堯舜よと見れ湯武
も子も慈愛ある者と云へし是堯舜の子に慈愛を
た者に非せして何ぞ殊る堯ハ數代傳はる宗廟の
祀多重しとせき先祖へハ大ふる不孝も非ずや又
堯も舜もゆつきたる時に舜も直にうけてハおゐん
いと見へて堯死して後其子丹朱もゆつきたる
ももし受て居ぬ事ふらく丹朱も譲るへ或由ふ
く舜も受ぬ前に堯も死したるハ舜も力以盡して

史記五帝本紀註曰堯德
衰為舜所囚也又云舜囚
堯復偃塞丹朱使不與
父相見也と見えうり
まよひつね

丹朱も不徳と輔佐て國を保ふも一も事て公然
人々慕へハとして自王と成ふはハ逆臣と云ふ
も當り前と云事てム鳥羽義著曰ム堯愚にして舜
ハ奪へば也幸老老してううくや改政執らせし
少舜好計と逞して人々明は衆を引て天下
奪つるも李禹舜の世多取すしも又同志と云は
こか是ハさも去へ事てムいかにも堯ハ愚昧
有らうと思ハぬも少し小賢者も見てハ
猥りハ天下河川に流うと云ひ又已れ天子とも名
れわふから農夫か賢り愚かと心む為に其女以

嫁せて辱とも思は十然れ共其去へる言ハハゆ
尤らし記言も阿るも是終今乃俗にも心大愚小
して其言語は聞て是利口はに聞ゆは者も有る
もの也又堯舜の民と云ふて渠らり世と見民共
まても何れ尊事小云ふ由ふれと其薄情ふして
忠實の心なれ事云へれやう自し孟軻と云ふ者
とハ堯舜は民ハ軒字並へて封をへし形と云へれ
共らとハ國々の諸侯小謀叛多進免歩行し惡者に
て其云色は言やもハ勸化僧の方便言と同じけれ
ハ論起るも是らも扱その不實ふめ故ハ先堯ハ治

世に深し心以勞し民を惠む余りて天下とし子
小ハ傳へて他人ふゆつてふとして憐むこと事と
聞ゆはにさむとば思ふ受まろ君乃子と譬へ惡
人ふもせも捨果て他人よりか程慈愛有てて已
らう為にハ幸のふ共夫尔付従て君を仰ぐハ推
並て忠信不死所為に非也やこと皆恩を知らさめ
者ふて竟りけしし心配しぬハ其うを了時の
と悦び死てけ後ハ更に其恩と思へる也舜
死後に禹に従へるも同じ事也大猫にも古主とは
慕ひて他家ふていう好と旨此物を與へても親ゆ

をひさもけ古主乃許にのみ歸らん事と思ふけれ
ハ其民らハ犬猫の心尔も答れに非ずや臣ハ節
ふしとい是ら乃事を去南りみれ人の事々しく去
亮舜の代の民は下斯乃如くふきハ彼國乃世々の
人情是に准へて思ひ計めへし漢國の人心ハ薄惡
ふやと去ふハ此とふて又民百姓此かやうに思ふ
思ハぬと以てたもへハ書經なにもも專けふ記
じほもみ南空言て有つとたもハさる少しの事か
も事々しく去ひ南をハ彼國の人の癖なにもハ必は
うて有うてハ聖人乃とと去ハハ老嫗々阿彌陀を

信也了如く一向小尊く腐儒者こと愚昧ハ至りと
申すべし物てム扱又その次に湯武ハ虐賊ふて是
ハ已去ふ道も明く人みふありさる事にハ有れや
も又稀にハ腐儒ハ云事尤として欺り此居る人も
有べしれハ今序不辨しませう扱先身一尔憎むべ
或ハ彼國ヲ學ぶ主とせり者共り湯武の弑虐以仁
義乃征伐と云ふれし其或強く云ては桀紂ハ惡
事々しく云立ちと云れとも是ハムを湯武ハ惡
罪ヲ覆はんやての強説てム己れ謂尔一大國の君
と生きて萬民の上尔立ちの明れを愚ふる生質ハ

者ハくしや云ふハあら詠くも桀紂ハ如を行跡の
有はしれ事ハ云べからむ違ふ臣をわ君を弑すハ
ら見れハ然れも奇怪な事とも思ハまぬてム譬
ハ桀紂ハ所為り群鼠の中に交りて猛き猫の居る
ら如きものて鼠の猫不制せらばくハ自然なる
て地の天を戴けて其位多変せさめり如く物ハ此
も猫の心も鼠に喰殺されりとハ思ハぬ等の中
也桀紂も其如く本より愚ふる者なれり群鼠の中
に湯武と云猫を喰む鼠乃有りやハ思はむに居る
らうてムは云ハ云や桀の言にも吾天下有つ事

ハ天の日はほか如し日亡ひふも吾も則亡ひふて
有りと云ふは君と為者れ真心不て實に君臣乃
道く樂ら言のとふふる牙支物也然るも君臣の道
は天地に則りて立たる物しや杯ふから祿とを
うとふる祿はと以ん理の至極と云ふし鼠の逐ふ
猫はあまはし死事の如く強て云いふはうとを
るに餘り於る僻説をたらしむは然れとも桀紂
が所為に必しも好と云ふてわ是を多く強て湯武
好すやうと云ふ人に愉さうや事ては湯武實に
或人からは殺して國を奪ふはてにせむとも外

ふ為方へ何程も有へ死事ては然ふも孟軻ふと
聞誅一夫紂矣未聞弑君也ふと云ふはたかくは
穢らひしく甚だ妄説なりはに女ひくろむると
も湯武が弑虐の罪を論ふに殊に彼國の史共々按
ずるに桀王るとはは乃み大なる惡虐も此れと
て乃るに湯が奸佞者て凡て人の思ひはくへ死事
の限りと為て民を不けけ黨を結ひたりと云ふは
是皆君子亡して天下を奪はつとての事ては其う
へ湯誓小湯自ら申ふは格爾衆庶悉聽朕言非台小
子敢行稱孤有夏多罪天命殛之爾と云てりの天命

唐国史補曰高定
貞公郢之子也年七
歲誦書至敬誓問
父曰奈何以臣伐君
答曰應天順人又問
曰用命賞於祖不用
命戮於社豈是順以
父不能對

や夫ふと小ふてにとり或もゆゑ爾尚輔予一人致
天之罰予其大賚汝無不信朕不食言爾不徒誓言予
則努戮汝國有攸赦なとく愚民以多として一致い
たさせいといふ君と伐滅して國と奪ひ取たのでム
然して後に自ら云ふにハ予恐来世以台為口實や
う申て後世の誹りたどきる仲虺小誥成作らせ
て其罪と陳しけせぬと然と共君と弑しし事
誰々口實とせむに置ぬせうと或漢籍に七歳の小
兒り尚書と讀て牧誓々至て其父小問て曰如何そ
臣として君を伐やと申たは處り其父對へて天小

應し人尔順ふと云ふれへ又問多用命賞於祖不用
命戮於社豈是人に従ふと云ふも乃らひやと云
ふに其父對ふるを能へむや云事々有る小兒せら
見解可憐者ハ斯以如くてム叔湯王へかやう尔惡
逆小行はる後ハまの民の吾尔叛かん事と畏れて
夏王滅徳作威以敷虐于爾萬方百姓爾萬方百姓罹
其凶害弗忍荼毒云々以と申ふはハみな俗小云ふ
猫ふて聲々々云ふを以て民の心多悦ハせ甚とく
梁王々惡と云へ君と為者ハ差して罪人黜伏天
命弗僭ふと誓と其惡虐云々此やうふししム然も

とも茲に朕未知獲戾上下慄々危懼若將隕于深淵
形と申ふると以て見れも心の中に其惡逆を知て
居る事とみへる又汝に善美事あらむ吾蔽
くほし若し我身に罪あり必ゆりて事な
れなとく云ふ又汝らに罪あらハ夫ハ我一人か
かもや若しわきにつみあらハふんあらハゆへと
云事ハ有れともしやふとやふ不佞言子以ても民以
懐け己も又人にも好はし死構つと成し
ぬ物てふも思ふし天の下の民下つとも有る
ハとて其衆人々の心くおて為る事ハと何ぞ

して其君のつとと云と有はせう是佞言也
らをして何て有るんて漢國の聖人賢と云ふ輩
ハかやうに理有る事とも事々しく云ひ立て人に
用ひられやうともはハ悉く佞言て全人民を
にやうとて乃計略てムかやうは謀言と夫中も
知ら屯尔尤と兼知して居るとムハ惡賢也やう
ふる國俗がうら又わう小愚鈍なる所も有てこは
ほ又周武王と父西伯り時りして陰徳と行ひ民
字ふつけ殷不叛とて諸侯已不強と小はらせ
て打平らる其領地を私に奪ひ取り天下を三分し

てその二はと有はと云程に有るら猶是る事を
知はす士を養ひ太公望と師として射術を學ひ紂
の惡の増長をめとまち西伯死て後終る兵を擧て
諸侯を會し例乃如く天命誅之と云て愚民とも
或はたとし或は懐け若と一獨夫受とれくし其
いに戦てうち破り紂を燔死と所に至まて矢
發り自ら君の頭をうちたり刺へに紂王と妻共乃
縊と死せるとも切はふりその惡虐なるは今見
ゆる如き斯して紂を國に奪ひ天命と云ひ上帝
と云ふ託言の並へ立て民を欺はれいに王と成る

は物てム斯とて後四五十年の程周に服せと殷の
為る忠義を存して挑みとる國か四十餘國はた
は汝是ら乃忠信者とハ頑民と号ておる者如
く云ひふしとてム此事に依ても國中擧て紂に叛
死とるふハ非る事ともはとるへく儒家者流ハ
かふやも云ハく云へ吾ハ周の代の頑民こと頼も
しけれ或人た乃れと叱て曰く子乃云ふ説も
皆世人の情を悖て乱れ小湯武が非とす事實
も過論と云へく又憎むへし彼國の經典も孔子も
湯武の徳を稱しとる多くと云ふは共誣れらハ

ふし子是を如何とせむに乃云ふ吾々徒の學ふ
所ハ吾古への大道を本とし規矩として學ぶこと
幾彼國の經書を知らにも古ハ此譬へ孔子の言行
や云へとも大支小取捨あるハ勿論の事なり況や
孔子は湯武の惡を覆して其行と善と稱したるは
其本心に非ずそ乃身の倍臣にして武王も己が君
は君より者の先祖を祀へふや湯たも合せて稱し
ぬるも湯王の殺虐と云時ハ武王の罪も著明けれ
そふやそ此本情に非ずと云故ハ春秋に周魯の惡
事たハ諱て他の諸侯とも乃惡醜とハ根を盡して

多記に露し又同姓を婚ふは昭公はも禮字知て
あてと去ひ又父ハ子の為に隱し子ハ父に為に
くも直其事其中有りと云ふは亦と或思ふへし
亦不云ハく伯夷叔齊と賢人なりとも仁とも也免
て仁を得たりとも去されハ其伯夷叔齊の言行と
ハ表裏ある湯武の所為と善ひとハ去まはて公且
表記小みへは孔子の語にも下之事上也雖有庇
民之大德不敢有君民之心仁之厚也と云ふは或も
くも味ふへ或事てハ是みち孔子の孔子たは所に
して彼の惡居下流訕上者と云ふは為言の空し

ら内なるも思ふへた事てム若し強て道ははるに
論して湯武を非とせし時ハ子貢の語に非其世者
不生其利行其君者不履其土と云ふる如く掎に乗
て海爾浮ふより外乃事受かた事てム是孔子乃大
小時務多辨へ大に人に優とふる所てム今乃俗の
庸儒者とも純らと初た孔子と本尊と立てるも
る不に轉るまハれともかゝる為孔子の意を辨へぬ
ハいふは狂心とや和漢は湯武を論せし者數家
ありと云へともさふ強て善人にせんやをぬ其負
口て小兒以欺くら如き浮説ふて更ふ去ふにも足

らぬ説共ふはる其中尔藍田東龜年が著せし湯武
論漢士下てハ先と申さる東坡が武王論乃仔細其
旨字得ぬは説と云へた物てムはて此堯舜禹湯文
武らの修飾致しよは道成二帝三王は道中も聖人
の道とも云へて甚しく尊ん事に申せども是はらに
くらひぬ道てムその道と規則として云く相殺し
相奪ふてやのけさ畜生鳴り異らら屯其ハ鳥羽義
著る言に湯武らる道ハ禽獸にひとし禽獸剛さハ
勝ち弱さへ負て徒ふり如し湯武は道を見んと思
はく今大の群集すは以て見し強て者なハ義者

有てかの弱も他と侵せいつくは者是と制
 り故不群犬か乃はよ死に伏と然と共其勢ひ子不
 傳よるを於し堯舜湯武の道是不同しと申ふは此
 説とく當はて常へ禽獸とひとし人賤し賤し
 免さる蒙古韃靼自やよ李攻入て國を奪ひ取り威
 勢はるを多為人方ふ者も其頭を低て天子と敬ひ
 其禽獸といや之免は國俗を改められふ了國中
 け者共二帝三王二聖人乃子孫らもよふはハ頭
 の髪は四方を剃て中のみ残しうれけし坊主とか
 云ふ風躰も変せられて辱しとも思はれとも片

腹いふも甚もたか一文事て幾有はせんう孰々味
 ひとろに是皆堯舜湯武らの制作しう道の過
 て且へ彼國人乃人情薄惡ふる故てハ斯ても中
 國の中華のと云て尊し腐儒者輩の心を奇怪に
 もけハか事てハ扱此王等の事と彼國の書共小
 譽て有ると見て狼狽さる人も皆然る事と思ふ様
 子わろ前に云如く大勲了非事ふて是を西戎の者
 とも世々此王等の為始免さると名則として相侵
 し相殺し相奪ひも十餘事故讚るも理わくハ譬へ
 ハ盜賊の仲間小てハ盜人の惡事成去者なく却

て大ふく盗多せるものとい甚しく譽ふ如く夫
と盜賊の仲間にて好む此ハとして其外此者とも
同じやうに譽るもの何て有はせう夫を不むる者
ハ必き湯武と同じハ賊心あるに相違明いてハ但
し湯武と譽る人の委く云ハ四は五つの差別有
り一ハ未初學の人ふて人がかぬるゆくに同
好む此ハを死人とて聞ゆる故に何乃辨つるか
く不たすも有り一ハ元未愚昧ハ生質小て文辭
不誑ハ此ハ人入ら一ハ租その惡虐と云事ハ惜
れとも一ハ儒者ハ業とすは者にて其惡字去立

は時ハ己ハ業の害とかゆ何くハぬ只に居
ぬも有り又一法ハ各各にて今迄ハ習氣を改め
事餘ハを心とへハ兩國橋邊ルてつものみせ物
ととしてみせり城河童乃意にて舟小入てみれば思
ひの外に兩具の合羽入れ舟に入てこゝめ事乃
ゆとらふ口惜けれハ出さうらみし此河童よと
て出た者如く今更に訛りもあらぬ人乃ぬま
く其惡字を愉せとも一向に受ぬら不して居候
有り己れら湯武と實に河童とや僻心得して見
る所思ハの外不欺らしたれば其合月不る由

ハ人ナシ聞せて、
ハ實情に湯武ヲ所為ト尤と思ふ者也。是こそハ湯
武同意の人や去ハ事てム。假令彼國の書等にか
先よりやも夫ハ多く例の言のよき文辭れと見
過して其實ハ其行ひの跡に據て彼ら善惡ハ
定むハ能くしてム抑かやう又穢し我王ともり世
此状と皇國れ免てム御世に比へて中華の昔ハ
及も杯と女ハ或ハ聖ハ乃道不て治て獲杯と云
其わゝなは妄言をや皇國にて湯武の道字を人用
とす者ハ三好義賢明智光秀の輩より其用ひと

は者ら乃成行は思ふし誰も人々ハたもハぬと
てム又夫とて世字登季てハ此條義時同恭時足利
高氏ふとの輩ハ有れとも是身我翁れ委く論ひ置
れ多れハ爰下も洩しぬ扱天下乃人悉く聖人ハ教
不依て禽獸に陥らすと申に幾何と云ふ狂言て有
はせり先此處とも何國と思ふとかけはくも可畏
れ天照大御神の御本國不して其御子と御坐はせ
天皇の代く知者も此皇大御國ふる以西我國の魁
首とも教に依て禽獸に陥ひ杯とハ其身皇國
の外に考ふらハまふしもけり云ハるハハヒも屯ハ

く純も此御國の内生れて飽まで御國恩と蒙り
居ふららる狂言と放たは更に人とは思はれ
ず聖人と云者此教との尊ひて夫一筋小行ハ
うやせりもハ夫ホを禽獸小陷溺しよる物ふム
冗かしこ其道を專と行ひたすハ北條足利の時代
又三好明智らり所業ふ然ると何と天下平場
也と云はと故せうぢ北條足利が時に相侵し相奪
ひて四海無事ららゆはも全を湯武の道行ハも
るゆへてム純ハ手操とる繩の如くゆかめり西戎
國の例子引て皇國ハ正しきに議せんとも吾も黒

繩を引とる如く直く正し此皇國の例子以て西土
の多くれば繩を議す為のてム其邪正尊卑實にハ
論に及はらる事てム抑俗の儒者乃桀紂の二王と
湯武の二賊とを評論と為所以思ふに丁度皇國ハ
古へ物部守屋大連の佛法の我國に行てれんや
めと嫌ひて聖徳太子曾我馬子ふとに亡らと
事と後世乃賊僧共り守屋大連ハ甚しに惡逆の如
く女ひふし刺へ小崇峻天皇と弑し奉つる馬子
等々ハ却て弑虐の罪を覆して善人と稱し可畏
も天皇ハしも御惡虐ハ坐しはしとる如く申ふし

奉法のば杯と同様乃邪説ふて甚もくく臆惡く實
しいほくくしと奴らてふ朱子乃語に佛法渡つて
くり善惡乃名か違てしは此と云まし、いり儒者
つの説もやつて善惡邪止ちつて居るて純
はと申には孔子乃教小従て堯舜の道子學ひ候也
幾天下の事何ても足らぬ事か候我等ハ只一
向小孔子を信し候へハ聖人の道をかハ失て明ふ
なす候と申て候るり孔子の教に従て堯舜の道と
學ふ時ハ天下のと何ふても思らぬと申しとハ扱
もくく狭く學者る南大宰はうわて於く漢學者ハ

大低かやう申て居るとしやハ孔子も儒有博學
而不窮と云ふ事も有は物成斯やうに時務に達
せはるる甚も憐むべしと云ふ事と聞ふつ
けても吾翁の儒學ハ學ふはよく小さくある物
也と云れざる事思ふ當て充尊く思ふはとて
此間も申ある儒生俗士豈時務を知らんや時務を
知らハ俊傑に有りと云へるハ尤ふる事ては是
に付て思ひ出ざる事有て今も五十年計り以前
志道軒や云ふ人有て俗講と業としとる其言
行と録せば風流志道軒乃傳と云も乃卷五首に録

てハ滑稽多記せむら其中又儒道の事に付て面白
此論のみ故に今こゝに取出して申ゆせり其父に
何れの國に至りても君臣父子夫婦兄弟朋友の五
の道亦もろゝ事なし人れ々にハらきらた蜜蜂の
飛ぶに君臣あり鳥乃及哺鳩の三枝亦父子の禮備
あり雞ハ羽多けけて雌多愛し猫の不遠慮にさり
るも夫婦共道也鼠ハ箕盤に乗兄弟あり犬の尾と
ふけて集り鯢屯ハ志で海にかへ返るも皆朋友
の道也伊藤先生論語と宇宙第一の書や云々
と云と其論語の中ふらへはた時の宜に隨ふべし

事あり沽酒市脯喰ハと云へども越後の塩引周
防乃けし鯖くしちハひ煎海鼠乃類と學者もどぶ
へ捨るもふを祭以醴よ李外子丹酒以作はあ
先生もろじ是唐亦身池田伊丹と云ふ名物の酒屋
も有く又海に遠紀國水へし引乃類此うはい事
字知らず物や猪子食ふ故に其教も又異なり薑と
すて屯志多食ふとい云へ共鱸のけんハ食ハぬと
云り又日本ハ禮あり井戸で育つ蛙學者ハ此は
多に唐具亦不成て我ら生きた日本と東夷と稱し
天照大神も吳の太伯不ちらひ等らひと附會の説

と云ひちららし文武の道と表し餘りちんぷんらん
の屁多ひにしても知行の采子周の外てもかり或つ
て渡りれなハ其時かへして聖人を恨むべし誰や
ら制札の多れは見て國の治らばると知りさ
と云ふら如く乱て後尔教ハ出来病有て後尔醫
藥有るららの風俗ハ日本と違ふて天子がわ
者も同然ふて氣入祢へ取かへて天下を一の
天下非也天下の人の天下也やつらと口と云ひ
ちらして主の天下をまつたはふらち千萬ある
國ハ聖人出て教へぬもの也日本ハ自然ハ礼義

を守り國ハ聖人出ても太平成ふ也唐ハ文
化にとらりて國と難難ふせしは此四百余
州がけし坊主に成ても自ら大清明人と覺へて鼻
と祢ふして居るやうな大としぬけのべらかうや
もふり日本にも昔より清盛高時が如く惡人有て
も天下にふらふと思ハる日本で天子多鷹略に
ると處外ふらふ三尺の童子もな返つて居ぬ氣に
なると云へ忠義正し我國故ふて夫故ふこそ天子
の天子多事ハ世界中に並ふ國有し唐乃法ハ皆
惡化ハばらば共風俗に應じて教へば却

て害あり然る小近世の先生多ち畑で水總を習ふ
やうな、經濟の書と作けて、俗人を驚かたて、片腹痛
まをかり、其位に在られハ、其政を以計らんと云、聖
人の教へを忘れて、聖人の道と説出すを、相撲取の
ふんぞし字ハ、きれて土俵以てとをさうら如し、其外
浮世の口すな學者、管乃孔より天とのと、灰火吹竹
乃鉤鐘を鑄るやうな、偏見以説出し、我身も、山姥以
も、う形だに、南はやうな、尻ハ二三寸かやも、出表
合の聖人にふらうと、まれば、麒麟鳳凰に星いで
け、ひき物でもいであうもの、と、自負を了學者も

世不多し、聖人の教てけ、其道に蕩らけられし、屁ひ
り儒者乃手小渡れ、も、人成迷へ、事多くなつ、時
ハ大に尔害有て、杯と云、了事有り、大低尤、了論
共てハ、〇扱又純ら、孔子の道と得たりとて、誇れは
事、聖學問答下も、乃へあるら、其語に、孔子の道吾り
眼に是と、了事、青天不白日を懸、た、り、如く、今不
至、多ハ、毫髮の疑も無て、或も、し、只今ふも、孔子尔拜
謁して、所見と呈露して、其是非と正さん、不、恐らら
ハ孔子も、必我字印可也、給ハ、ん、自じと、甚い、り、を
しく、傍若無人に書ちらし、さ、は、ら、然れ、を、毛、純、り、人

と云ふ事、其著書も亦依りて考るに、孔子の教と
熟く覺てゐる男てへ更いふれば、是ハ只人の強
に、聖人の道ヲ引入んと思ひ故ル、斯ク強言ん去は
亦、若強て純カ人となすの如く亦多し、聖人の道
亦、明けた事と云うれば、彌く聖人の道ハあま
紀道で、西土の道の中とるべし所ハ、律令官職の
事ヲ修飾しとる類にて、皆皇國の道の枝葉ヲ御取
用ひるやれは、物也、何も其上と強ふに及ばぬ
事てハ、或人傍より申せ、我國の制度は、律令と
じめ、大抵漢法と移しぬるも乃なれど、其本ハ亦て

律令も、何より此國のと讀て、定む事なす、我國此
れ學ばん、其甚迂遠に事なすといふ、已云ふ夫ハ普
通の人ハ、誰も一と通り、はか思事なれど、甚しき非
言也、先皇國の律令も、西土の制に依り立られ、
如々見ゆとも、我か國上古より、の御制とも、
しの國に制や合せて程なく、定免らとこる者て
ム、然る故、彼國に有る制の條、皇國の御制亦
或事共も多有て、又相違の事も少むからず、然るに
此國の學讀むとも有へ、皇國の學ハ、
有は志き事て、其故ハ、彼國乃制の用、所ハ皆

此方にうつし取て、趾ハ用ふく、譬ハ白^{フル}、帳ハ如^{フル}、
物故乃事て、殷の代の制ハ、夏の制ハ、
夏乃制^{フル}、成^{フル}、學^{フル}、
ひ足とも、用
形^{フル}、
やううち^{フル}、
もの、
周の代に、
殷の代の制乃無益
ふるも、同じとて、
況や、
漢國と、
我國と、
風俗善惡も
異なる事^{フル}、
れども、
尚更乃事^{フル}、
て、
孔子も、
吾徒^{フル}、
周と申
ハ、
當代乃と學^{フル}、
べくと云事^{フル}、
て、
然れ共、
故^{フル}、
死^{フル}、
と温
て新と知^{フル}、
は、
學問を了者の常^{フル}、
をきく、
曰^{フル}、
以^{フル}、
學^{フル}、
はん
も、
惡しとハ、
非^{フル}、
ち^{フル}、
れ^{フル}、
共、
其^{フル}、
旧^{フル}、
を^{フル}、
の^{フル}、
み^{フル}、
取^{フル}、
て、
新と廢
は、
漫^{フル}、
り^{フル}、
ふる事^{フル}、
て、
俗^{フル}、
に^{フル}、
生^{フル}、
者^{フル}、
知^{フル}、
り^{フル}、
か^{フル}、
は、
學^{フル}、
者^{フル}、
等^{フル}、
ハ、

時勢時務と辨へ、
て、
周禮^{フル}、
ハ、
有^{フル}、
る^{フル}、
と、
礼記に見^{フル}、
へ
ふ^{フル}、
こと^{フル}、
な^{フル}、
や^{フル}、
ハ、
其^{フル}、
ほ^{フル}、
く、
用^{フル}、
ひ^{フル}、
ても、
害^{フル}、
ふ^{フル}、
に^{フル}、
も^{フル}、
人^{フル}、
思^{フル}、
ん^{フル}、
甚
と、
非^{フル}、
事^{フル}、
て、
ム^{フル}、
け^{フル}、
て、
又、
純^{フル}、
は、
孔子乃道^{フル}、
を、
孰^{フル}、
人^{フル}、
悟^{フル}、
て、
ふ^{フル}、
る
男^{フル}、
に、
非^{フル}、
も^{フル}、
や、
去^{フル}、
故^{フル}、
は、
孔子ハ我^{フル}、
ら、
國^{フル}、
を、
尊^{フル}、
び^{フル}、
て、
中^{フル}、
と
し、
他國とハ、
身^{フル}、
ハ、
免^{フル}、
て、
夷狄と申し、
昔^{フル}、
々、
王公は、
る者
とハ、
敬^{フル}、
て、
其^{フル}、
惡^{フル}、
ハ、
申^{フル}、
は、
ず^{フル}、
して、
其^{フル}、
善^{フル}、
の^{フル}、
こ^{フル}、
を、
稱^{フル}、
し、
我^{フル}、
は
過^{フル}、
ち、
受^{フル}、
ても、
我^{フル}、
君^{フル}、
乃、
非^{フル}、
多^{フル}、
蔽^{フル}、
し、
生^{フル}、
涯^{フル}、
周^{フル}、
室^{フル}、
の、
衰^{フル}、
微^{フル}、
を、
歎
て、
道^{フル}、
の、
行^{フル}、
ハ、
と、
ん、
事^{フル}、
多^{フル}、
願^{フル}、
ひ、
ふ^{フル}、
る^{フル}、
ハ、
西^{フル}、
我^{フル}、
國^{フル}、
ハ、
最
も、
忠^{フル}、
心^{フル}、
深^{フル}、
く、
て、
ム、
然^{フル}、
る^{フル}、
に、
純^{フル}、
を、
凡^{フル}、
て、
春^{フル}、
秋^{フル}、
乃、
意^{フル}、
と、
多
語^{フル}、
して、
内^{フル}、
外^{フル}、
の、
差^{フル}、
別^{フル}、
ハ、
知^{フル}、
れ^{フル}、
を、
孔子も、
天^{フル}、
無^{フル}、
二^{フル}、
日^{フル}、
土

無二王と云ひ又為人臣者無外交不敢貳君と云見
へは物故吾ら大君の坐しはすに漫る西戎の
魁首多我が仕へ奉る君たりも尊れも此と稱して
我ら古へは賤しめ彼ら國と中華と申て我が國子
夷狄と賤し國に忠あるべし心ハ露むかすも正い
てハ孔子も儒懐忠信以待奉とも主忠信とも云ひ
禮記にも忠信禮之本也無本不立共と論語にも
君子ハ務本本立而道生ふと申て聖人以道おも本
以專と務むべしことと教へ了事ふれ共純々學ハ
其大本立せ又我が國の事子知る事子要とせば漢

學の末と乃と執へやふとゆるゆへハ漫る不狂言
と放ちて國躰ハ損をば甚ハ我國の制度に背或
は事て既に左傳ハ毀則為賊と有ハ純ハ賊
不當とある者てハ猶申は禮記ハ入竟而問禁入
國而問俗入門而問諱と云教へも有り又孝經不愛
其親而愛他人者謂悖德不敬其親而敬他人者謂之
悖禮とも見へてハ純自ら悖德ハ仁ハ非キヤ聖
學問答にも云ふから我國子疎みて由ハ此外國
と愛するハ悖德悖禮に非キし多何ぞ彼今には
ハ惡事とあるとも我が古へは稱我國にし忠有

るをく務むるを學者の本旨にて孔子の意小もり
ふふべれ左傳ふも諱國惡禮也と有は杜預ら注に
掩惡揚善義存君親共々へは況や萬國尔優れて
尊文御國尔生れて此國尔住は此國の米と喰ひ
から恩と戴て恩字知らぬ食其食者不毀其器蔭其
樹者不折其枝とさへ云ぬるも有る者以純等へ
も斯まで國尔不忠はは讐字以多恩に報ゆると
云ふ物小て最も憎むべき事て孔子も以怨報德
刑戮之民也と申し置の事て公

論語集注卷之八

